

輸入粗飼料の情勢

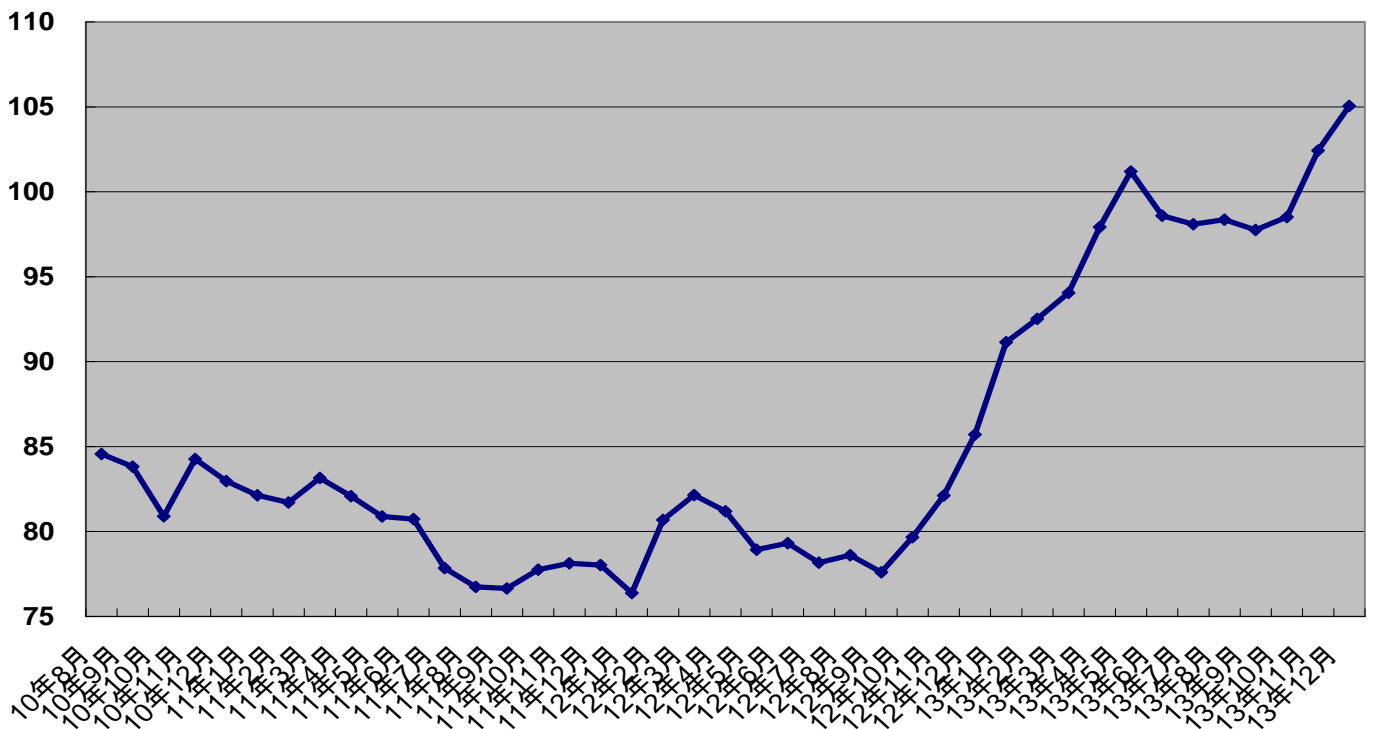
全酪連購買部
購買推進課

新年明けましておめでとうございます。
本年も宜しくお願い申し上げます。

“スピーディーかつ分かりやすい”をモットーに、今年も輸入粗飼料の情勢をお伝えしたいと考えています。ご愛顧のほど、どうぞ宜しくお願い致します。

外国為替（対米国ドル）の影響

外国為替 円/米国ドル （各月末営業日レート）



11年産、12年産に引続き、13年産の北米産乾牧草の産地価格は、アルファルファをはじめとしたいずれの草種も良品不足や、UAE（アラブ首長国連邦）や中国からの強い引合い等の要因により、同時期に穀物や燃料も高騰した08年産と変わらないか、それよりも高い水準で推移しています。豪州産オーツハイについても、09年産以前に比べると、近年は高い水準で推移しています。一方で、外国為替は長らく円高・米国ドル安水準で推移し、10年9月から85円/ドルを超える円高がおよそ

2年以上も続きました。この間、強い円高に支えられていたため、乾牧草の産地価格が米国ドル建てでは高く推移しているにもかかわらず、円貨にすると数年前と比べてあまり高くない水準で推移していました。しかしながら、12年11月の衆議院解散の前後から徐々に円安に動き始め、12年9月末は77.6円/ドルで推移していた外国為替も、12年12月末は85.7円/ドルまで円安が進み、13年5月末には101.2円/ドルまで達しました。その後は90円台後半で推移していましたが、11月からは再び100円台に突入し、13年12月末は105.1円/ドルまで円安が進みました。

産地価格がドル建てで高いがゆえに、少しでも円安が進むと円貨では大きな“値上げ”となります。今後もさらに円安に向かうことになれば、どの草種もグレードが高いものほど円貨でもさらに高くなることとなります。既に一部の草種では、酪農向けには費用対効果のある価格帯ではなくなっているものも見受けられるため、他草種への移行や、グレードを落として使用することも、ますます検討する必要があると思われます。また、アルファルファについては、プレート価格差から使用する産地を見直すことも、検討する必要があると思われます。外国為替（対米国ドル）は、輸入する側にとっては楽観視できない環境が続くと考えられるため、今後も注意が必要です。

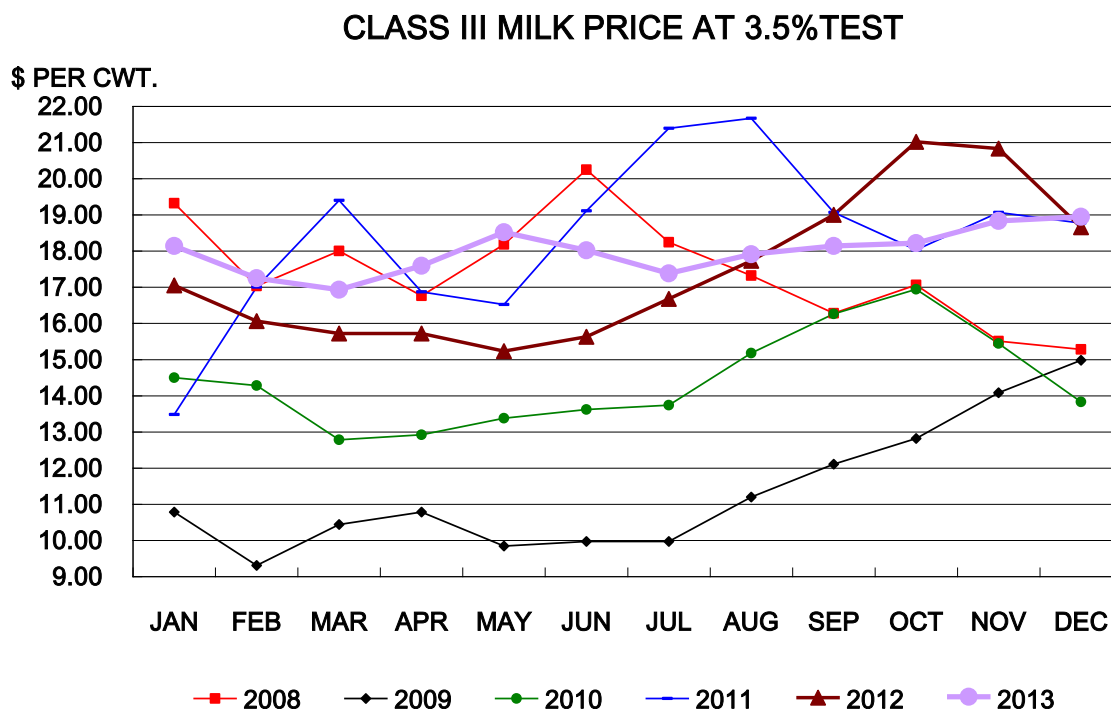
北米コンテナ船情勢

1-3月分のBAF（Bunker Adjustment Factor 燃料費調整係数：燃料価格変動に対して調整される割増運賃）について、多くの船会社で\$10の値下げが実施されました。GRI（General Rate Increase：基礎レート）については、1月1日付けで値上げ実施を発表していた大半の船会社が、2月1日付けに延期している模様です。しかしながら、どの船会社もコンテナ部門の採算悪化が続いていることから、今後も海上運賃は強含みで推移することが予想されています。

PSW（Pacific South West area：太平洋側南西部地区）のロサンゼルス/ロングビーチ港では、これまで船腹スペースに余剰感もありましたが、穀類の相場価格が一時期に比べると軟化していることもあり、アジア向けの穀類のコンテナ積みが増しているため、徐々にタイトになってきていると一部では伝えられています。また、今まで無料で貸出していたシャーシについて、同港でも今後は貸出しを停止すると発表している船会社が増えている模様です。デリバリーの混乱や仕入価格の上昇が懸念されるので、今後の動向には注意が必要です。

PNW（Pacific North West area：太平洋側北西部地区）のシアトル/タコマ港やポートランド港では、輸入量が輸出量に追いついていないため、引続き空コンテナが不足している模様です。降雪や路面凍結によるコンテナ搬入の遅れが発生しやすい本格的な冬が始まっています。今後はデリバリーの混乱にも注意が必要です。

米国の乳価動向



米国乳価グラフ：クラスⅢ チーズ向け CWT（100ポンド≒45.4kg）当たり \$

米国の乳価（上記グラフ参照）は、12年11月に比べると低調に推移していますが、その後は安定して低くはならず、昨年13年は年間を通じて、以前よりは高い価格帯で推移していました。乳製品の相場価格が堅調に推移していることが、背景にあると考えられます。米国の酪農情勢・乳価動向については、輸出向けアルファルファの産地価格・情勢にも大きな影響があるため、今後も注意が必要です。

ビートパルプ

<米国産>

13年産の生産は、9月中下旬から各地で開始されました。春先の冷涼な気候により、ビート大根の作付けは遅れてスタートしていたため、12年産よりも遅い進捗となりました。

砂糖の相場価格が低調に推移していることと、作付けの遅れにより単収が減少していることと見込まれていることから、13年産ビート大根の収穫面積および13年産ビートパルプの生産量は、12年産よりも5%程度減少していると伝えられています。より生産量が減少している欧州からの引合いも強いことから、当初はトウモロコシなどの穀類の相場価格と同様に軟化することも期待されていた産地価格も、思ったほどは軟化せず、堅調に推移している模様です。

<中国産>

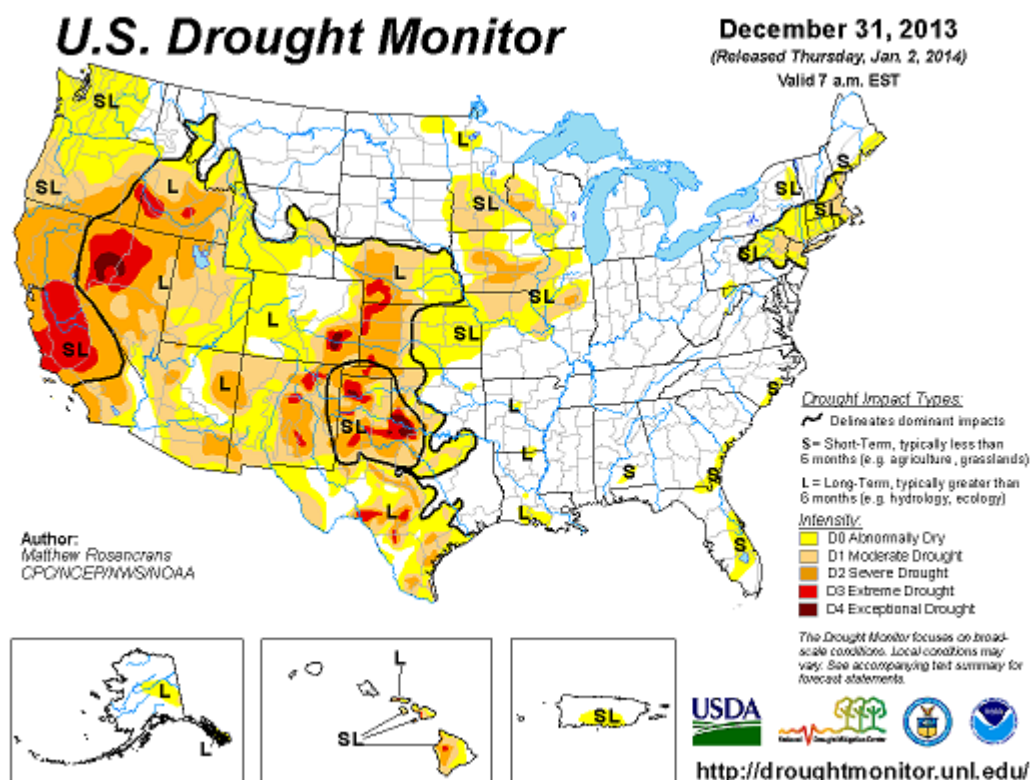
中国産の13年産ビート大根の作付面積は、12年産よりも減少している模様です。生育中の天候も良くなかったため、13年産ビートパルプの生産量は12年産よりも25%程度減少するとも伝えられています。国内市場の拡大が進み、国内向けの需要もさらに増えることが予想されています。

韓国と日本向けへの13年産の中国産ビートパルプの輸出数量は、限定的となることが見込まれています。買付けを断念してもらうために提示しているような、かつてないほどの高い価格も、日本の市場では聞かれています。そのため、他産地ほどは生産量が減少していない米国産へ切替えることも、有益であると思われます。

アルファルファ

13年産は、どの産地も雨当たり被害に悩まされたシーズンとなりました。特にPNW産（ワシントン産・オレゴン産ほか）は、どの番手でも雨当たり被害を受け、良品の発生が少なく、例年では考えられないような悪い作柄となりました。

現在、カリフォルニア州中央部およびネバタ州北西部周辺では、旱魃傾向となっており、放牧用の牧草の生育にも影響が出ているようです。そのため、肥育農家から乾牧草の引合いが強まっており、アルファルファの産地価格も上昇傾向にある模様です。



米国内の旱魃（Drought）状況 12/31時点

カリフォルニア州中央部およびネバタ州北西部周辺は、極めて（Extreme）ひどい旱魃、あるいは異常なほど（Exceptional）ひどい旱魃となっている。

また、前月号でもご案内した通り、米国産アルファルファの輸出数量は、UAE向けと中国向けに次いで、日本向けは現在第3位（2013年1-10月は366,785mt）となっています。UAE向け（同554,986mt）と中国向け（同472,533mt）の輸出数量を合わせると、全体（同1,630,298mt）の6割以上を占めており、米国産アルファルファの輸出向け市場の主導権は、両国が握っていると言っても過言ではありません。14年産以降も、両国への船積みはさらに増えることが予想されているため、今年も動向には注意が必要です。

チモシー

<米国産>

主産地のコロンビアベースンとエレンズバーグでは、1番刈の収穫時期の6月中下旬に断続的な降雨があり、80-90%程度の深刻な雨当たり被害が発生したため、13年産は“史上最悪な厳しい作柄”となりました。ハイグレード品の発生量はかなり限定的で、確保は困難な状況となっています。そのため産地価格についても、ハイグレード品から中間グレード品については、12年産以上に高騰して推移しています。また各サプライヤーとも、10月出港分から屋内くん蒸費用を加算しています。為替円安の状況下で、特に酪農向けには、費用対効果のある価格帯ではなくなっているのが米国産チモシーの現状です。他草種への移行も、検討する必要があると思われます。

13年産では、雨当たり被害が酷いローグレード品でさえも韓国向けに多く出荷されているため、どのグレードもほぼ売切れ（成約済み）となっている模様です。順調な需要と船積みを受けて、近年では作柄が良くても悪くても、生産コストに対して高く売れており、チモシーは“儲かる”農産物として産地では定着しています。トウモロコシなどの穀類の相場価格が一時期に比べると軟化していることもあり、14年産の米国産チモシーの作付面積は、増えることが早くも見込まれています。

<カナダ産>

主産地のレスブリッジ（アルバータ州南部・灌漑地域）とクレモナ（アルバータ州中央部・非灌漑地域（ドライランド））では、収穫時期に降雨があり、ハイグレード品の発生は限定的となっています。米国産の状況を受けて期待されていた13年産のカナダ産も、残念ながら作柄は悪い結果となりました。そのため、米国産と同様に、産地価格は手の届かないところまで高騰して推移しています。為替円安の状況下で、特に酪農向けには、費用対効果のある価格帯ではなくなっているのが現状です。米国産と同様にカナダ産チモシーについても、他草種への移行を検討する必要があると思われます。

順調な需要と船積みを受けて、13年産は作柄が悪くても生産コストに対して高く

売れている模様です。小麦やキャノーラなどの穀類の相場価格が一時期に比べると軟化していることもあり、米国産と同様に14年産のカナダ産チモシーの作付面積も、増えることが一部では予想されています。

スーダングラス

<インペリアルバレー産>

13年産の早播きの1番刈は、収穫前に続いた暑い気候が生育に影響し、全般的に茎サイズにバラつきがあり、予想以上に茎細品の発生が少ない結果となりました。早播きの2番刈や、小麦収穫後に播種する遅播き（アフターウィート）のスーダングラスについては、例年より早く7月中旬から湿度が高くなり始めたため、茶葉混じりのスタックが多く発生しました。茎細のプレミアム品や、きれいなスタックの発生が少なかったことから、13年産のスーダングラスは、茶葉の混入が目立つローグレード品を除いては、ほぼ売切れ（成約済み）となっている模様です。そのため、産地価格についても、引続き強含みで推移しています。

デュラム小麦の相場価格が引続き軟調に推移していることから、14年産は早播きのスーダングラスの作付面積が増えることが一部では予想されています。しかしながら、インペリアルバレーでの農業用水の使用制限について、昨年に続いて今年も実施強化が懸念されることから、スーダングラスの作付面積は減ることも一部では予想されています。

クレーングラス（クレーンは全酪連の登録商標です）

13年産の1-2番刈は、生育期と収穫時期に暑い気候が続いた影響で、今年も良品の発生が多い作柄となりました。3-4番刈についても、色あせ（ブリーチ）が目立つスタックの発生もあったものの、良品も発生しています。産地価格については、スタート当初から韓国向けの引合いが弱めに推移していたことも受けて、12年産よりも少し軟化して推移しています。禾本科牧草の中では相対的に割安感もあるため、作柄が最悪で産地価格が高騰しているチモシーや、産地価格が強含みで推移しているスーダングラスから切替えて使用することも有益であると思われます。

インペリアルバレーでのクレーングラスの作付面積は、12/15時点でのエーカーレッジレポートによると、前年対比107%の17,462エーカーとなっています。スーダングラスと同様に、農業用水の使用制限について実施強化も懸念される一方で、クレーングラスは多年草で刈取り回数も多いことから、生産コストに対して収入が安定している農産物であるとも考えられるため、14年産の作付面積がどのように推移するかは、予想が難しくなっています。

バミューダ

インペリアルバレーでのバミューダの作付面積は、12/15時点でのエーカーレッシェレポートによると、前年対比95%の50,853エーカーとなっています。年々上昇しているバミューダの種子の価格は、引続き高値で推移しています。そのため、13年産のバミューダでは、牧草よりも種子の生産意欲が強まっている模様です。

ストロー類（フェスキュー・ライグラス）

13年産の米国産（主にオレゴン産）ストロー類について、トールフェスクは7月上旬から、ペレニアルライグラスは7月中旬から収穫が開始されました。どちらも雨当たり被害は、ほとんど発生していない模様です。

韓国向けについて、自給飼料の作柄が良いことから、あるいは米国産チモシーや豪州産オーツハイのローグレード品へ需要が移行していることから、米国産ストロー類の引合いが思ったほど伸びていないとも一部では伝えられています。産地価格に影響が出てくるか、今後の動向には注意が必要です。

豪州産オーツハイ

<西豪州（ウェスタン・オーストラリア州）産>

13年産は、50-60%程度の雨当たり被害が発生しています。1-2回軽く雨に当たっているものから、5-6回も当たっているものまで、雨当たりの程度は圃場・スタックにより異なる模様です。生育中にも降雨が十分にあったため、単収は平均6.0-7.0mt/haと昨年（平均4.0mt/ha）よりも多く、雨に当たっていないスタックでも、分析値はあまり良くない傾向となっています。そのため、中間以下のグレード品の発生が中心となっており、ハイグレード品の発生は限定的となっています。また、何度も雨に当たっている圃場もあるとはいえ、大半が“軽い雨が降っては乾き”の繰り返しで済んでいるため、ノーレイン品だけではなく雨当たり品も、13年産は見た目がそれほど悪くない仕上がりとなっています。



13年産西豪州産オーツハイ（左）中間グレード品（右）ローグレード品 ともに12/12撮影



13年産西豪州産オーツハイ ローグレード品（原料草） 単収多く茎は長め ともに12/13撮影

<南豪州（サウス・オーストラリア州）産>

13年産は、30-40%程度の雨当たり被害が発生しています。西豪州に比べて雨当たりの程度は軽いものの、生育中に降雨が十分にあったため、単収は平均6.0-6.5mt/haと昨年（平均5.0mt/ha）よりも多く、雨に当たっていないスタックでも分析値はあまり良くない傾向となっています。そのため、中間以下のグレード品の発生が中心となっており、ハイグレード品の発生は限定的となっています。また、雨当たり被害は発生しているものの、大半が軽い雨で済んでいることもあり、ノーレイン品だけではなく雨当たり品でさえも、13年産はとてもきれいな仕上がりになっています。



13年産南豪州産オーツハイ （左）中間グレード品 （右）ローグレード品 ともに12/10撮影

<東豪州（ヴィクトリア州）産>

13年産は、20-30%程度の雨当たり被害が発生しています。西豪州や南豪州に比べると被害は少ないものの、生育中に降雨が十分にあったため、単収は平均6.0-6.5mt/haと昨年（平均4.5mt/ha）よりも多く、雨に当たっていないスタックでも分析値はあまり良くない傾向となっており、ハイグレード品の発生は、それほど多くない結果となっています。また、南豪州産と同様に、雨当たり被害

は発生しているものの、大半が軽い雨で済んでいることもあり、ノーレイン品だけではなく雨当たり品も、13年産はきれいな仕上がりとなっています。



13年産東豪州産オーツハイ (左) 中間グレード品 (右) ローグレード品 ともに12/9撮影

13年産オーツハイは、収穫が11月までに終了しています。どの産地も雨当たり被害が発生していますが、“輸出25年の歴史のなかで最も酷い作柄”と言われた2年前の11年産ほど酷い状況ではなく、見た目はきれいなローグレード品が多く発生しています。ハイグレード品の発生が限定的でも、見た目がきれいな中間グレード品やローグレード品の発生が多いことが、13年産の作柄の大きな特徴です。

輸出向けの生産量については、西豪州産で400,000mt(例年だと約250,000mt)、南豪州産で300,000mt(同250,000mt)、東豪州産で200,000mt(同100,000mt)、合計900,000mt(同600,000mt)はあると予想されるため、中間以下のグレード品が多く発生していることが伺えます。そのため、ハイグレード品の産地価格は強含みで推移しているものの、中間グレード品からローグレード品については徐々に弱含みで推移している模様です。通貨の豪州ドルの動向次第でもありますが、豪州産オーツハイがグレードによっては日本で使用しやすい価格帯となれば、作柄が最悪で産地価格が高騰しているチモシーや、産地価格が強含みで推移しているスーダングラスから切替えて使用することも有益であると思われます。

また、12年産はどの産地もほとんどがハイグレード品だったこともあり、数量に差はありますが、在庫を繰り越すことにより13年産のハイグレード品の不足を補おうとするサプライヤーも幾つか見受けられます。一方で、繰越在庫も少なく、ハイグレード品を確保できていないサプライヤーや輸入業者も多いことから、中間以下のグレード品の見た目が良いことを受けて、分析値があまり良くないスタックでもハイグレード品として売ろうとする可能性も出てきています。その場合、嗜好性不良のクレームが発生する可能性もあるため、買付け時には注意が必要です。

以上